

識はすでにもっていた。しかしこの二度の巡検によって、さらに明確に、かつ深く理解できたことはまことに幸いであった。がそれにも増して感銘を深めたのは、この二人の少壮（当時）地理学者のもつ識見の高さ、幅の広さであった。お二人とも、狭義の専門からは外れていると云って云えなくもない分野について、格別の用意もなしに、現地において明快な説明をなし得る、その蓄積には敬服したものである。

しかしこの二例は決して例外ではなく、寧ろ極めてあたりまえであることは、いろいろな場合に訪れた大学の人達と話し合い、あるいは歩いているあいだに解った。老大家はもとより、少壮の地理学者もまた、いわゆる専門分野については云うに及ばず、地理学の諸分野について、幅広い、しかもときには高い識見をもっている事実を私はしばしば知ることができた。それであればこそ、たとえ教授陣は少数でも、さまざまな分野を志す多数の学生を指導できる条件がとも角具備されているわけであろう。特定の分野に深く没入し勝ちなわが国の地理学者の場合とは、どうも対照的なように思われる。このことは、ただに、大学教授の任用の制度、その仕方などのちがいに係わるものなのであろうか。

わが国を訪れる海外の仲間の数は毎年相当なものである。個人できたり、グループできたりなど。その人達から、ややまとまった話、あるいは現地での説明などをときどき求められる。私自身のいわゆる専門分野が何であるのかなどは先刻承知の上で、なおかつ彼等が話を、説明を求める対象は、例えば東京の発達についてであったり、一緒に歩いた地域の地形についてであったり、実にさまざまである。私が日本の地理学徒の一人であるからには、そのような課題についても当然一応の話はできる筈と彼等が考えているのではないか、そんなふうに私には思えてならない。

ね　こ　の　噺

大　貫　俊

犬や猫をペットとして飼っている人は珍らしくないが、それを数匹飼う人となるとかなり限られてくると思う。私は決して自慢する積りはないが、わが家に現在猫が数匹いる。ところで動物を群れ飼っている、1匹の場合にはわからない習性が色々わかってきて、その限りでは面白い。俗にいわれていることが正しかったり、間違っていたり、場合によってはあてはまるということもわかってくる。以下思いつくままに猫の常識を検討してみよう。

犬は飼主にこびるけれど猫は反対である。だから犬の好きな人はワンマンで、猫の好きな人は民主的だという説がある。これはある程度当たっているが、どうも野性の残留度と関係があるらしい。猫のなかにも媚婦的な猫がいることを申し上げたい。

猫は崇るとか化けるとか、知的レベルの低い伝説がある。残念ながら本当だという実例は体験していない。しかし前頭葉がないにしては、頭のいゝ猫とわるい猫の差は大きい。ある人の説によると、人間の顔（本当は目）をじっと見つめる猫は「精の入った猫」といって崇る可能性があるから大事にした方がいゝという。空腹な時でなくとも、何気なく視線を感じさせる猫はあまり気味のいゝものではないのは事実だ。何を考えているのかわからないから。

猫は家になつくので人になつくのではない、という説がある。昨家庭先に新居を建てた経験からいうと、家になつく猫の方が少ないように思う。家が出来る前から出入りして、人間が引越すときにはもう住みついている猫もいるが、古い家屋が解体されても、なお野宿して頑張る猫もいた。その猫はお産の数時間前になってやっと新居に居つくようになった。

猫がお産をするときは、とくに初めてのときは非常に不安なものであるらしい。誰でもいゝから函の中に仲間を呼び込みたがる。そういうときに“人のいゝ猫”がよくつきあってあげるようだ。上手に育てる猫と、まるで生み放して遊びまわるのがいる。

猫は自分の生んだ仔を喰べるといふのが本当でしょうかという質問には、野性の残っている猫はそういう場合があると申し上げる。身体が弱いとか、病気で育つ見込みがないと思うとお乳を飲ませないようだ。

猫仲間の仁義というか、居心地のいゝ場所に先客がいたら、猫は人間にはききとれない猫語で挨拶しながら、先客の身体をなめまわす。それをしないと一喝されてしまう習性があるらしい。

喰物にも嗜好があつて、生魚をみるとじん麻疹をおこすのか、やたら身体をなめまわして喰べようとしない猫がいる。海苔、とうもろこし、ほうれん草など妙なものに夢中になる猫もいる。

猫の観察記録を書きだせばきりがなからもうやめます。何故地理学と関係のない猫の話のかくのかと抗議する方があつたら、馬鹿だと思つてあきらめて頂く他ない。猫の世界に人間社会の原点を探っているなどとは申しません。

リオ・デ・ジャネイロの季節

西 沢 利 栄

1977年11月、5年振りにブラジルを訪れ、翌年の9月までの10ヶ月間、リオ・デ・ジャネイロに滞在して、住み慣れた東京の顕著な季節変化とは異つたゆるやかな季節の移り変わりを体験することが出来た。

1971年と1973年の2回、ブラジルを訪れ、リオでホテル住まいの2～3週間を過ごした事もある。しかし、この2回の訪伯は、いづれも3ヶ月足らずの短い期間であり、そのうえ調査のために各地を移動した事もあるが、ヴィヴィッドな季節の移り変わりを知ることも、また味わうという事もなかった。

そんな訳で、機会をみてブラジルのどこかに住みつき、一年を通じての季節現象を見てみたいと考えていた。幸いにも今回、その願いが叶えられて、一年間ではなかったが、一年の大半を一ヶ所に住み、カリオカに混じって生活することが出来た。

リオに住み始めた頃、私は友達によく「リオの季節の移り変わりは？」という質問をした。そんなとき「ないね」とか「5月頃になると快適な気候になるよ」とかいう答えが多かった。また、リオ在住の日系人に尋ねても「一年中景色は変らないしね」という様なことであつた。そして、私自身も12月から2月頃までの最初の3ヶ月程は、さっぱり変わりばえのしない木々の緑や道ゆく人々の服装な